ヤマハニュース

YAMAHA NEWS 1973 号外

'73/第2回 ヤマハ グランド スポーツ フェスティバル

祭典

5000人

'73／第2回ヤマハ・グランド・スポーツ・フェスティバルは、8月4日、5日の両日、静岡県・富士スピードウェイに、延べ9万5千の参加者を集めて、盛大に開催された。

モトクロス、ロードレース、カートレース、安全運転競技、それにトライアルやジムカーナなど、多彩な催しが新たに加わって、名実ともに、世界に類を見ないモータースポーツの一大祭典となった。

北海道から、沖縄から、そして広く海外からも、モータースポーツを愛する人びとが集まり、若さが激突する熱戦と、なごやかな交歓風景をくりひろげた。

規模も内容も昨年を大きく上回わり、競技に出場する者、観戦する者が、共に富士に燃えた二日間だった。

花ひらくモータースポーツの

●北海道、沖縄、そして海外から……富士に燃えた9万

ース選手権大会

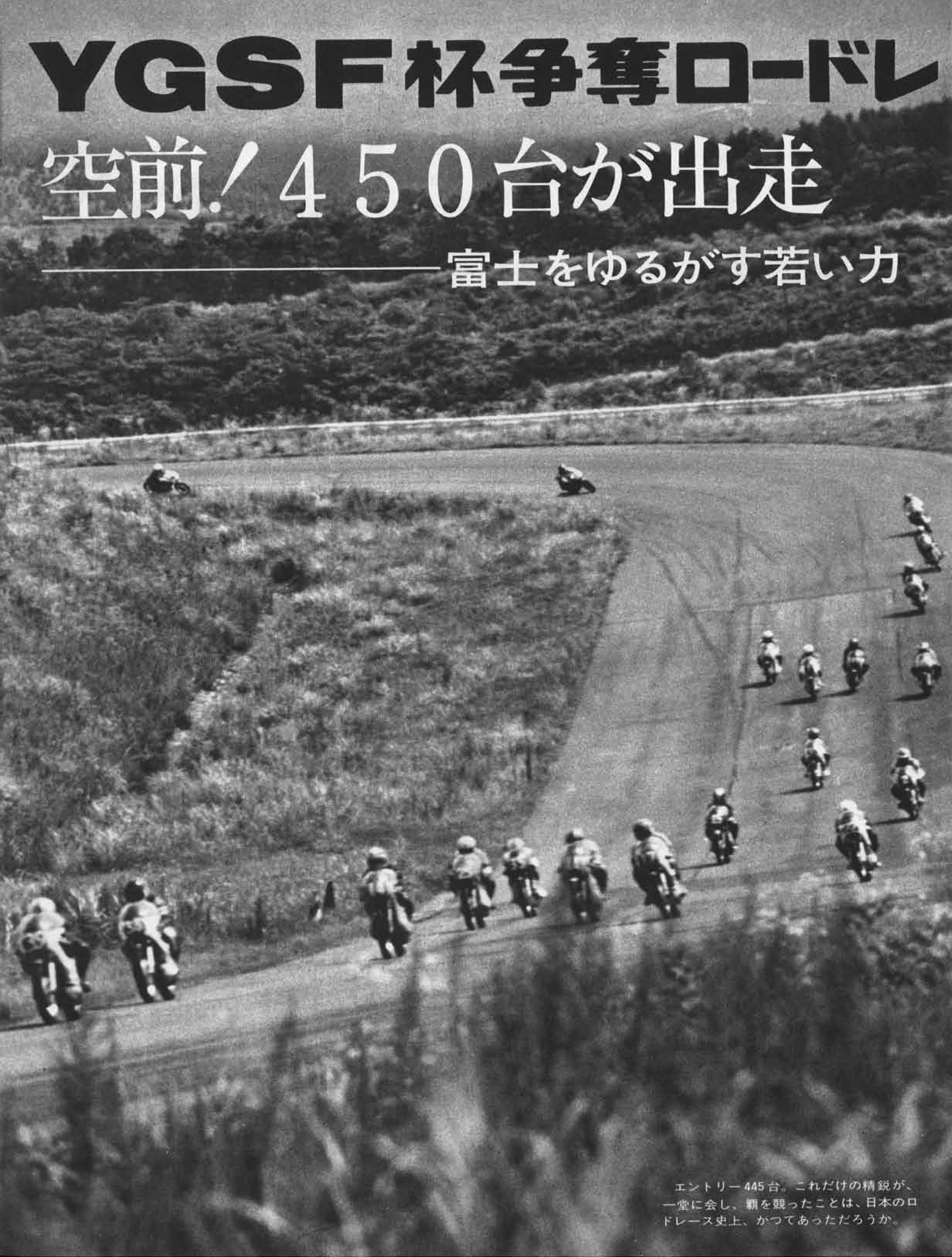
★見たぞ！海外超一流のテクニック★

多数の外人選手を迎えて、国際色豊かにくりひろげられたYGSF杯争奪グランプリ。注目のポッケット91、ケル・キャラザース選手は、元世界チャンピオンらしいダイナミックな走法で観衆を魅了したが、惜しくもセニアクラス第4位にとどまった。

YGSF杯争奪ロードレ

空前！450台が出走

――富士をゆるがす若い力



エントリー445台。これだけの精鋭が、一堂に会し、覇を競ったことは、日本のロードレース史上、かつてあっただろうか。

片山敬済（E・J）が独走

YGSF杯争奪グランプリ

外人選手を交えて行なわれた「YGSF杯争奪グランプリ（350cc級）」で、エキスパートジュニアの片山敬済選手（神戸木の実レーシング所属・ゼッケン69）はスタートから快調に飛ばし、独走体制でゴールイン。総合優勝とエキスパードジュニアクラス優勝を遂げた。

エントリー四百四十五台。日本のロードレースの歴史始まって以来の選手陣を迎えて、「YGSF杯争奪ロードレース選手権大会」は幕を開けた。

しかも海外より一流選手や観客を多数迎えて、国際色豊かな雰囲気。出場する者、観戦する者、ともに一層の熱が入った。

四日は公式予選。さしもの富士スピードウェイのパドックも、レーサーとライダー、メカニック、ヘルパー、そして、甲高い排気音で埋まった。

はじめてロードレースに参加する若武者を含めて、ノービス部門の出場者が激増。ヤマハ・グランド・スポーツ・フェスティバルがモータースポーツの底辺拡大に役立っていることをうらづけていた。

五日、早朝より決勝

健闘の日本選手勢

ＹＧＳＦ杯争奪グランプリではホームグラウンドの利もあってか、日本選手陣が上位を占める健闘ぶりを示し、はるばる親善レースに参加した外人選手陣はセニアクラス４位以下にとどまった。ゼッケン３は、セニアクラスに優勝した金谷秀夫選手（神戸木の実レーシング所属）

レースのスタート。ノービスもジュニアも、エキスパートジュニアも、力一杯走った。前日の予選で惜しくも破れた選手たちも、心からの声援を送った。

各クラスとも、レースへの情熱を傾けた健闘ぶりを物語る高水準の記録が続出した。

メインエベントの「ＹＧＳＦ杯争奪グランプリ」は、アメリカより参加したケル・キャラザースをはじめ、カナダ、シンガポール、ブラジル、ベネズエラなど各国からのトップライダーに、日本のセニア、エキスパートジュニアライダーも交えて行なわれた。

スタンドにあふれんばかりの大観衆を前に、ロードレースのダイゴ味をあますところなく披露し、観衆は、疾走するマシンとライダーに惜しみない声援を送っていた。

《相まみえた好敵手》

◆本橋・河崎←→キャサリーニ

昨年、ブラジルのインテルラゴス500マイルレースで、日本の本橋明泰、河崎裕之両選手がタッグを組んで優勝したことは、ブラジルのレース界で大きな話題になったが、そのとき、本橋・河崎組に破れて2位になったブラジルのヒーロー、デニシオ・キャサリーニ、ウォルター・ツッカーノ組から「こんどは日本のＹＧＳＦでもう一度、勝負を決したい」との申入れがあった。
あいにくツッカーノ選手は都合で来日できなくなったが、富士で本橋・河崎組に再会したキャサリーニ選手は、なつかしい好敵手を見て、大声を上げて、かけ寄ってきた。

▲キャサリーニ選手と歓談する本橋選手

◆高井・大脇←→サスワント・ホワン

プレイメイトレーシングの高井幾次郎、大脇俊夫の両選手は、シンガポールＧＰ、マレーシアＧＰなどですばらしい成績を残し、インドネシアでも大変な人気がある。もちろん、インドネシアレース界の3羽鳥といわれるチャチャップ、サスワント、ホワンの各選手とは好敵手の間柄。「ＹＧＳＦ杯争奪グランプリ」で、久びさの対戦となった。

▲左からサスワント、高井、ホワンの各選手

紅一点ことしも挑戦

昨年のＹＧＳＦで、ただ1人の女性ライダーとして活躍、みごと敢闘賞を手にするなど、話題をまいた次郎長ライダース（静岡）の佐々木エリ子さんが、腕をみがいて、ことしもノービス 125ccクラスに挑戦。このクラスは出場車120台という激戦のレースだけに、入賞は逸したが、その勇敢な走りっぷりが、またまた話題を呼んだ。

パドックは国際レース級

お国はちがっても、モータースポーツを愛する心は同じ。レース中以外は選手たちもきわめて和気あいあい。日本人選手の中にも海外レースの経験者は多く、身ぶり手ぶりをまじえながらのレース談義も堂に入ったもの。

最高殊勲は荒木選手(J250)

5日、午後4時30分からの表彰式で、川上杯はノービス部門＝橋本久仁啓、ジュニア部門＝佐藤順造、エキスパートジュニア＝片山敬済、セニア部門＝金谷秀夫の各選手に贈られた。また最高殊勲選手には、ジュニア部門の荒木博選手が選ばれた。

YGSF杯争奪ロードレース選手権大会レース結果

♣ノービス90ccクラス

1	小坪勝喜	福岡プレイメイト
2	鈴木辰己	
3	倉田源治	横浜サンダーボルト
4	白浜良一	プレストMRC
5	宮原修二	城南RC
6	大貫正弘	オートルーキーRC

♣ノービス125ccクラス

1	坂田勝治	ビクトリーR
2	大沢一代志	HERMIT
3	小川邦夫	ヤンガーズ
4	山本篤美	〃
5	吉川文明	RT神戸
6	河相律志	

♣ノービス250ccクラス

1	橋本久仁啓	神戸木の実R
2	佐野文良	松島レーシング
3	高橋力也	小田原キャッスル
4	細淵恵則	アラオカR
5	野村栄司	神戸木の実R
6	日野照男	白井レーシング

♣ジュニア90ccクラス

1	新田茂	神戸木の実R
2	有福勲	スハラレーシング
3	大庭太一	御殿場サイクロン
4	青山到博	チームアオヤマ
5	大沢利夫	MPR
6	山崎茂武	ナカレーシング

♣ジュニア125ccクラス

1	松岡平八	HSR
2	石井康夫	プレストMRC
3	大庭公一	御殿場サイクロン
4	鈴木哲夫	神戸木の実R
5	針見進	狭山レーシング
6	佐藤順造	オートルーキーRC

♣ジュニア250ccクラス

1	荒木博	スポーツライダース
2	平井隆	野田ジュニアRC
3	阪本裕介	センバ
4	遠藤正則	
5	渡辺勝雅	野田ジュニアRC
6	上野真一	レーシングスポーツ

♣ジュニア350ccクラス

1	佐藤順造	オートルーキーRC
2	山田純	フライングドルフィン
3	大河内盛夫	チームスガヤ
4	杉山進	清水ハリケーン
5	千代茂	スポーツライダース
6	嶋田泰司	ワールドワイドMC

♣エキスパートジュニア125ccクラス

1	毛利良一	神戸木の実RT
2	青木辰己	プレイメイトRT
3	江崎正	レーシングスポーツ
4	熊野正人	スハラレーシング
5	加藤昇平	オートルーキーRC
6	坂西信芳	チーム永楽

♣エキスパートジュニア350ccクラス

1	片山敬済	神戸木の実R
2	輝井璋	ワールドワイド
3	加藤昇平	オートルーキーRC
4	河田清	沼津マリーナR
5	高野敏郎	
6	安田孝男	SSRT高取

♣セニア350ccクラス

1	金谷秀夫	神戸木の実R
2	河崎裕之	プレイメイトRT
3	高井幾次郎	〃
4	K・キャラザース	米国
5	S・ベーカー	カナダ
6	糟野雅治	フライングドルフィン

"長さん"(チョウ)久びさのカムバック

「YGSF杯争奪グランプリ」の話題のひとつは、"長さん"こと、元世界GPライダー、長谷川弘選手のカムバック。7年前、世界グランプリロードレースに優勝した富士スピードウェイで、再び世界の強豪と相対したが、マシン不調で惜しくもリタイヤ。海外ライダーとの親善も兼ねて、レースを楽しんでいた。

出走120台。激戦のN125ccクラス

ノービスクラスの出場選手が多いのがYGSF杯争奪ロードレース選手権大会の特長だが、ノービス125ccクラスで、なんと120人ものエントリーがあり、担当者もビックリ。大激戦の末、ビクトリーレーシングの坂田勝治選手が優勝したが、まさに価値あるYGSF杯となった。

にして覇を競った

アル選手権大会

1000余のギャラリーを前に、トライアル・チャンピオンの妙技をみせて人気を呼んだミック・アンドリュウス選手のデモンストレーション。そのテクニックは、さながらオートバイ演技ショーといえるほど魅惑的で、新たなトライアル・ファンを急増させた

●チャンピオン、ミック・アンドリュウスを前

YGSF杯争奪トライ

▶セクション5つめ。さて今度もうまくクリアーで、それトライ

▶トットット……と。深い溝を走る。身体が淵にさわると減点だ

▶ソロリ、ソロ、ソロ……急坂を登り、180度転回して急坂を下る

★YGSF杯争奪トライアル選手権大会成績★

順位	氏名	マシン	減点	クリーン数
ベストパフォーマンス	畑山 和弘	TY250	58	14
ランナーアップ	河村 寛重	〃	61	15
1st. クラスアウォード	末吉 敬市	〃	61	7
〃 2	増田 俊裕	〃	67	9
〃 3	三宅 修	〃	76	8
〃 4	清水水勝美	〃	77	11
〃 5	上原 保男	〃	77	9
〃 6	福岡 吾郎	〃	77	9
〃 7	森田 通夫	〃	78	10
〃 8	近藤 博志	〃	79	7
ベストクリーン	河村 寛重	〃		⑮

▲ミックの視線を浴びて、ちょっとかたくなりながら、いざ、トライ

▲ヨォ、ヤッ。深い段付を登ったがバランスくずして片足つき減点！

ロードレースやモトクロスにつづく第三のスポーツとして、最近急激な高まりをみせているトライアル競技も、このフェスティバルの焦点のひとつであった。

なかでも〝トライアルの魔術師〟といわれるチャンピオン、ミック・アンドリュウス選手に対する人気は絶大で、来日いらい日が浅いにもかかわらず、五日午前、午後の二度にわたって行なわれた模範走行には千余のギャラリーをあつめて会場は黒山の人となった。

いっぽう、日本全国からオートバイを扱ってはは人後におちない——というウデ自慢がつどい、互いに共通の「ヤマハトライアルTY250」でライディング・テクニックの妍を競った『YGSF杯争奪トライアル選手権大会』も、それぞれが難関のセクションを舞台に熱のこもった競技を展開して注目をあつめた。

この競技は、ヘヤピンとグランドスタンドにはさまれた丘陵地帯を中心に、午前10セクション、午後10セクション2ラップの都合30セクションで行なわれたもので、急勾配のアップ、ダウン、溝地、玉砂利、水溜り、タイトカーブなど、ミックの指導のもとに変化にとんだ地形がつくられ、ようやく地についた日本のトライアルの水準を示すものとして競技の行方が話題を呼んだ。

参加選手は四十六名。優勝のベストパフォーマンスには三重から参加した育英高校一年生の畑山和弘選手がクリーン14、減点58で初のYGSF杯を獲得、ミックから〝スジがよい〟とほめられ、ほほを紅潮させていた。

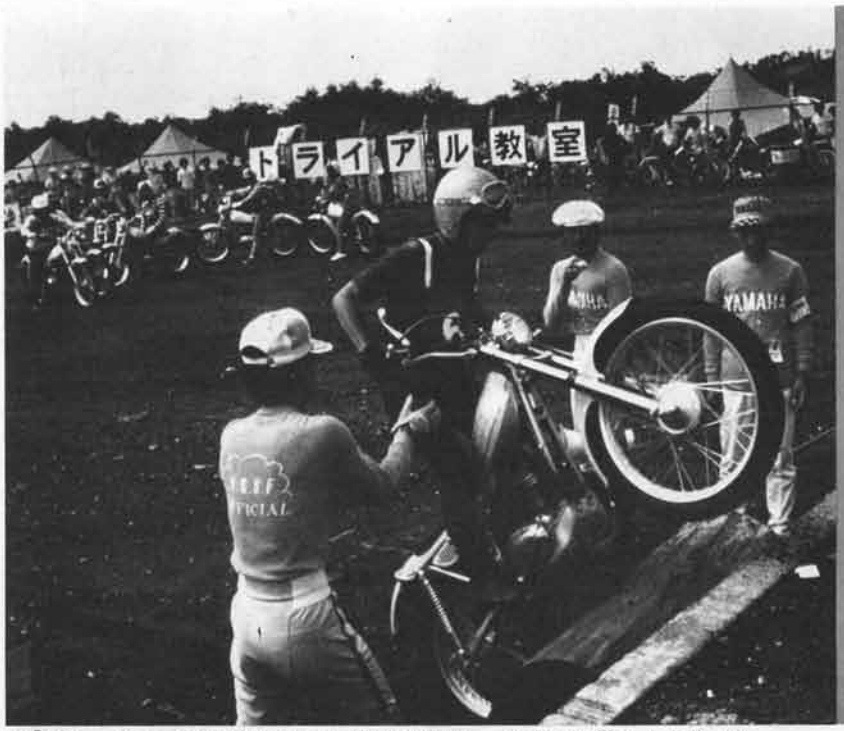
トライアル教室

「こんなことが出来ると思わなかった」まさにトライアル専用車の威力。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

見たぞ！やったぞ！

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★



▲「それ、タイミングがおそい！」特訓1時間で、自分でも驚ろく上達ぶり。

トライアルのＡＢＣをコーチするトライアル教室には〝トライ＆チャレンジ〟の精神を持った若い受講希望者が二日間にわたって、殺倒した。

二輪車安全運転特別指導員の大月信和、酒井圭吾、小泉清の三氏が講師となって、変化に富んだ四つのセクションでトライアル・ライディングを指導。ヤマハが開発したトライアルマシンＴＹ250を見られる、乗れるという興味も手伝って、教室の周囲にできた人垣は、休憩時間になってもくずれなかった。

また、トライアルの世界第一人者、ミック・アンドリュウスも模範演技を披露。会場をわかせた。

▲段差、上り、下り、丸太越え、そして大玉石走行。

▲チャンピオン、ミック・アンドリュウス選手も特別講師として参加。

ース選手権大会

「YGSF杯争奪カートレース選手権大会」は、五日、ロードレースと同じ、四・三キロのショートサーキットをフルに使って、スリリングな展開をみせた。

国内汎用エンジンを搭載したS（サブスタンダード）クラスの百三十二台を筆頭に、100cc以下の専用エンジンを搭載したAクラス、101cc以上のオープンクラス、合わせて二百五台がエントリー。昨年の二倍の出場者でYGSF杯争奪戦が競われた。

むき出しの車体。パワーのあるエンジン。直線コースではオートバイ並みの流れるようなスピード。コーナーでは上体を大きく傾けて曲り、デフのない後輪がきしむ。

公式予選から決勝まで、はげしいデッドヒートに観衆はわいた。

カートレースは、十二才以上の出場が公認されているうえに、ヤマハカートRC100のような専用カートの発売も加わって、これからの発展が大いに期待されている。

●地をはうスピード、コーナリングのスリル

YGSF杯争奪カートレ

YGSF杯争奪
カートレース選手権大会
成績

♣Sクラス

1	棚田　昭	WJKF
2	加藤達夫	白井レーシング
3	西原愛三	〃
4	野田　克	GKG
5	佐藤和亘	松島レーシング
6	金子明弘	ポルシェR

♣Aクラス

1	磯浦光伸	東京カータース
2	広橋敏生	東京コンペカート
3	小山一男	チャールブラウン
4	正城　勲	松島レーシング
5	原　賢二	チャールブラウン
6	横町啓造	オートスポーツ

♣オープンクラス

1	志村須美雄	東京カータース
2	小泉好章	
3	杉山　茂	松島レーシング
4	浅川幸夫	
5	古谷忠道	東京カータース
6	斉藤俊夫	

世界ＧＰのエンジンを積んだ怪物マシン

ＴＺ250といえば、世界選手権ロードレースで勝ち抜いているチャンピオンレーサーだがこのエンジンをカートに搭載して出場したツワモノがいる。静岡の松島カートレーシングクラブに所属する杉山茂選手だ。このマシン直線コースでは時速250キロをゆうに越える怪物マシン。「でも、コーナーでは馬力にテクニックが負けてしまって…」クラスオープンの３位にとどまった。

長蛇のローリングスタート

スポーツカーを先導に、各車整然とスピードを上げていく。メインスタンド前で、先導車がパッと横へそれる。その瞬間、各車いっせいにアクセルをふかす。ローリングスタートもカートレースの魅力のひとつだ。

奥さま選手、晴れの表彰台へ

晴れの表彰台上で敢闘賞を受けるのは、クラスＳ出場の紅一点、森洋子さん。神奈川のチャーリーブラウンに所属し、カート歴は５年。しばらくレースから遠ざかっていたが、カート仲間もふえたし、ＹＧＳＦ開催に刺激されて、久しぶりの出場。カートショップを営むご主人をメカニックに、男性に伍して頑張った。「女性が４、５人は出ると思ったんですが…。でも、女性のカートファンがふえているので、これからが楽しみです」

ボクはチャンピオン

カート・クラスＳは弱冠13歳の棚田昭クン

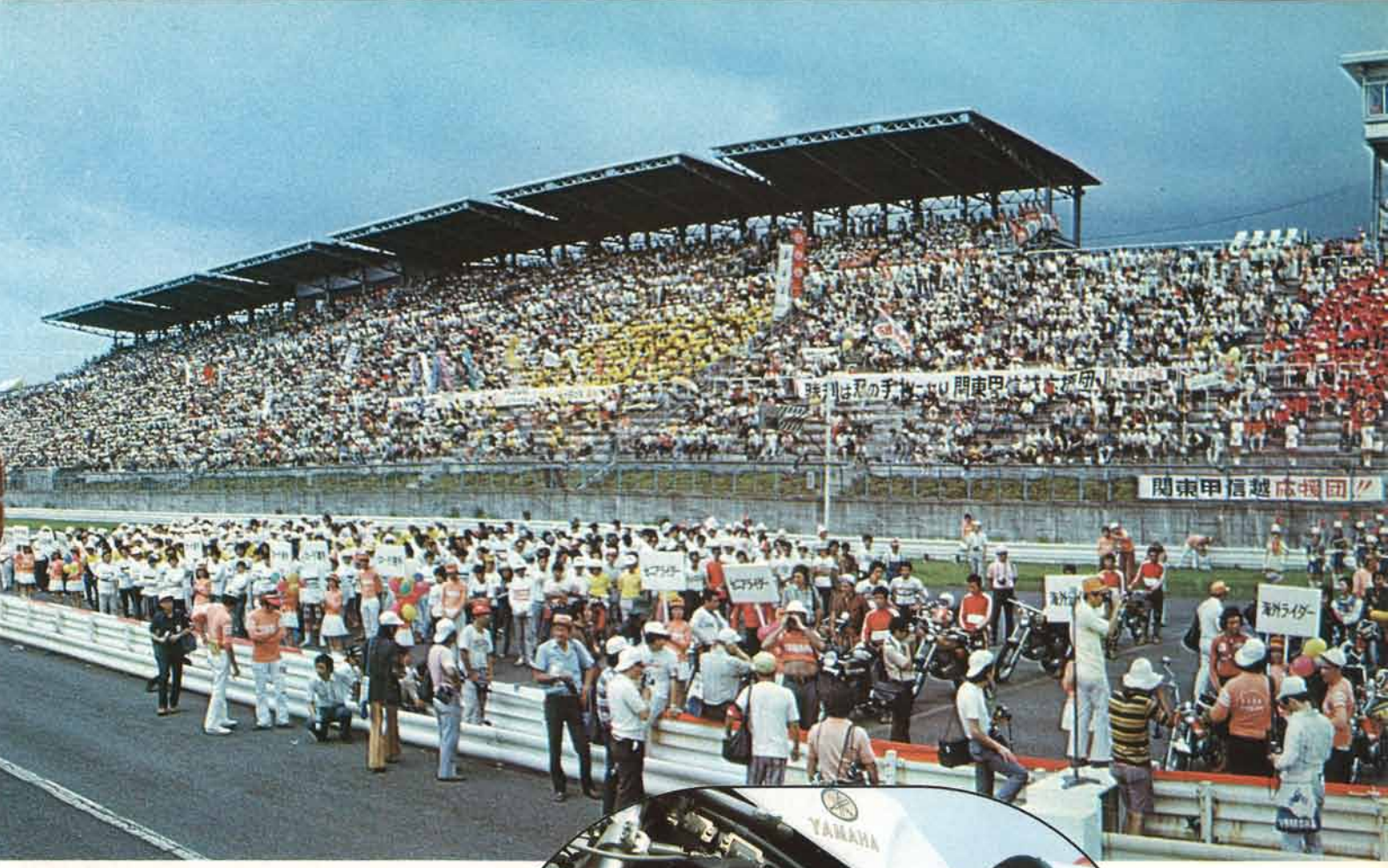
カート第７レース、クラスＳは先導車と共に一周の後に、50台を越すマシンが一斉にスタート。

表彰台に立つ選手の中に童顔の少年が一人交じっている。その少年がカートＳクラスのウィナー棚田昭クン、岡山県和気郡のカート一家の棚田クンは、10歳の時に父にすすめられてカートレースに参加。マシンの調整も自分でやるという棚田クンは、同じレースに出ている兄の博史サンを含む精鋭を相手に見事にその栄冠を勝ち取った。

「優勝なんか考えてなかった。二周目のストレートで頭にたった、あとはブッチギリです。カーブでのコーナリングがなんとも言えない、とくにヘアピンが最高。今度から兄貴にテクニックを教えようかな。」ガッツ棚田クン!!

オープニングセレモニー

●スタンドを渡る感動の波



劇的なデビュー ニューマシーン ヤマハYZR750!!

オープニング・セレモニーは、五日午前十一時より、富士スピードウェイ・メインスタンド前に『ヤマハ・グランド・スポーツ・フェスティバル』の参加者全員が集まり、はなやかに行なわれた。

メインスタンドを立錐の余地もないほどに埋めつくした大観衆。その視線が一斉にコースのかなたに向けられる。

バトンガールを先頭に、美しいユニフォームのブラスバンドが、軽快なマーチとともにやってきた。京浜女子大学横浜高校吹奏楽団、東海大学女子短期大学部鼓笛隊、関東学院高校マーチングバンドの面々だ。健康な若さがコースいっぱいにあふれる。

つづいて、日章旗、YGSF旗を掲げた少女たち、そして選手団の入場だ。

昨年、モトクロス部門の団体優勝を遂げた関東Aブロックが胸を張って行進する。ついで関東B、関東C、北海道…。全国十一ブロックのトレール杯争奪選手権シリーズを勝ち抜いてきた選手達の晴れ姿だ。ブロックごとに分けられた、色どり豊かなユニフォームの胸にYAMAHAの文字が、ひときわ目立つ。

黄色いユニフォームの中部ブロックの選手団が、メインスタンドに向って両手を挙げる。それに応えて、スタンドにも黄色い小旗の群が花のように咲いた。

九州ブロックにつづいて、沖縄選手団の入場だ。選手は総員七名。このいちばん小さなグループに、いちばん大きな拍手が湧いた。

ブラスバンドの演奏がつづく中を、ロード

なつかしのOBレース

花やかなオープニングセレモニーの会場を一瞬、静寂が支配した。世界のレース界を席捲するヤマハ技術陣が、ここに特別公開する750ccエンジンを搭載したファクトリーマシンが、いまスタートしようとしている。ライダーは本橋、三室、金谷、河崎のヤマハライダー。轟音とともに、4台はスタート。真赤なストライプを観客の目に焼きつけて、第1コーナーのかなたへ消えていった。

日本のモーターサイクルスポーツ興隆の基礎を築いた往年の名選手たちが、再び顔を合わせて開催したOBレース。ヤマハスポーツFX50の性能をたくみに引き出しながら力走した結果、浅間時代の名ライダー、宇野順一郎選手が優勝。2位は、かつてのモトクロスの王者、荒井市次選手、3位は元世界GPライダー益子治選手が占めた。

レース選手団が入場してくる。

やがて、ヤマハスポーツ、ヤマハトレールに搭乗したモトクロス、ロードレースのセニアライダーたちが、メインスタンド前に並ぶ。途端に、エンジン音を吹きとばすほどの歓声が、スタンドから湧き上った。

日本のレース界の揺らん期を育てた、なつかしのOBライダーも、そろいのユニフォーム、そろいのオートバイで入場してくる。

そして、はるばる海外から参加した外人選手団。司会の三保敬太郎氏の紹介に応えて、大きな手を挙げる。

ヤマハ・グランド・スポーツ・フェスティバル上島清介総合本部長（ヤマハ普及本部・本部長）が力強く開会を宣言。

日章旗、YGSF大会旗、ヤマハ社旗がスルスルとメインポールに掲る。

関東Aブロックの伴野代表より優勝旗の返還。

ついで、小池久雄大会会長（ヤマハ発動機専務取締役）が「モータースポーツを愛する皆様と共に、ヤマハ・グランド・スポーツ・フェスティバルをさらに充実したものにしていきたい」と挨拶。選手たちの健闘を祝す。

また、地元小山町長の祝辞。選手を代表して、ロードレースの大ベテラン、三室恵義選手が、正々堂々と闘うことを宣誓する。

選手団が退場したあと、サントワラーズによるドリリングの妙技。ヤマハ世界GPレーサーの試走。OBレースなど、多彩なエキジビションが、いつまでも興奮を呼んでいた。

イダーが覇を競う
ス選手権大会

国際色豊かにセニア250ccクラス
世界の都良夫、実力発揮!!

ヤマハセニア"七人の侍"にアメリカから世界GPライダー・P・カールスマーカーはじめ4名の外人選手を交えて、ことしのセニア250ccクラスは、国際色豊かな、見ごたえ十分のレースとなった。

カールス・秀明、ベテラン忠男のケガによる欠場は、つめかけた大観衆を残念がらせたが、日本勢では"FIM杯125ccモトクロスAグループチャンピオン"を決めてヨーロッパから帰ったばかりの都良夫、ケガの癒えた瀬尾のヤングコンビが大健闘、外人勢では、ベテランがにカールスマーカーがGPライダーの実力を見せる――

この三者が、文字通り目の色かえての10周2ヒート戦。モトクロスのダイゴ味をイヤというほど見せつけたが、結局レースは、調子の波に乗る都良夫が2ヒートとも1位で完勝した。

●北海道から沖縄まで、TCMSのベストラ

YGSF杯争奪モトクロ

YGSF杯争奪モトクロス選手権大会は、二シーズン目を迎えて、ますます意気あがる日本全国十一ブロックの'73TCMS（トレール杯争奪モトクロス選手権シリーズ）の全国大会。

北は北海道から、南は沖縄まで、全国十一ブロックから集まった選手たちは、いずれも地元の激しいシリーズ戦を勝抜いて、ここ富士に登場した精鋭ばかりだ。

それだけに、みんなふるさとの栄誉をかけてひた走る、応援団も力の限りの声援を送る。4日の予選、5日の決勝、YGSFの2日間モトクロス会場は、若さあふれるすばらしいレースがつづいた。

たくましく実力を発揮して！

八月四日、予選前まだ公式練習中のモトクロスコース脇には、早くも各ブロックの応援団席が設けられた。

関東甲信越が、昨年と同じゴール地点に、横幕を張り、太鼓を置いての陣を張れば、スタート直後の丘の左右両側には、中部ブロックが金のシャチのお城をかまえる、また関西／中国ブロックは、チャピィのいちごと大ダルマで景気をあおるといったぐあいだ。

昨年にも増して、この「YGSF杯争奪モトクロス選手権大会」に寄せる各ブロック代表と応援団の意気ごみのほどがうかがわれる。

また、各ブロック毎に、色分けされたユニフォーム姿の代表選手たちは、いずれも自信を秘めた闘志いっぱいの表情。

なにしろ、数あるYGSFのイベントの中でも、このモトクロス部門は、幾多の厳しい難関を通過して始めて出場できる、名実ともに全国から選りすぐられた精鋭によるものだ。

これが、さらに四日の予選でふるわれ、五日の決勝に残るだけでさえ並み大低のことではない。

TCMSが契機となって、ことしからモトクロスを始めたミニトレールクラスや市販車クラスの若者も、百戦練磨のベテランも、まずは全力で予選通過をめざす。

『晴れの檜舞台です。持てる力をフルに発揮して、絶対にマシントラブルでリタイアすることだけは避けさせてやりたい』と語る競

技役員、ここには、勝負を度外視してTCMSで鍛え上げた実力を、たくましく発揮しあう場というかんじだ。

こうした中で、たくましくのびのびと走りまわるライダー。特異な火山灰の難コースに敢然と挑む若者たち、そこには明らかに昨年の第一回YGSFを上まわる成長した「YGSF杯争奪モトクロス選手権大会」があり、二シーズン目を迎えてますます充実している'73TCMS全十一ブロックの姿がもののみごとにうかがえたのであった。

選手、役員の呼吸もピッタリで、スケジュールどおりレースはきびきびと進行し、結局川上杯は、小園功(ミニ)、村上光保(ノービス)、東福寺保夫(ジュニア)、熊谷義貞(エキスパート・ジュニア)の各選手に輝いた。

また、最高殊勲選手賞は、ジュニア三クラスで大健闘の東福寺選手に、敢闘賞は、九州ブロックから参加、ノービス三クラスに着実に上位入賞を果した光安鉄美選手に贈られた。

YGSF杯争奪モトクロス選手権大会ブロック別得点表

クラス / ブロック	ミニトレール		市販車		ノービス				ジュニア			エキスパート・ジュニア		得点合計	順位	前年順位
	50cc	60-80	100cc以下	101cc以上	50cc	90cc	125cc	250cc	90cc	125cc	250cc	125cc	250cc			
北海道	2	8	1	1	11	1	1	3	1	5	2	7	1	44	6	4
東北	5	—	12	3	3	1	1	2	4	2	7	—	—	40	7	6
関東A	9	3	12	10	5	8	15	15	19	12	16	—	—	124	1	1
関東B	3	4	2	11	1	2	6	1	3	4	7	5	9	58	4	9
関東C	11	9	2	1	10	9	7	6	10	8	2	—	—	75	3	2
中部	7	7	10	6	6	10	9	16	1	11	7	7	9	106	2	3
関西	3	7	4	2	2	—	1	2	3	2	2	2	2	32	9	5
中国	2	7	5	11	2	3	3	2	7	3	2	—	—	47	5	7
四国	—	1	1	—	—	1	—	1	1	2	—	—	—	7	12	10
九州	9	—	2	4	3	8	7	1	—	1	2	—	—	37	8	8
沖縄	—	—	—	—	—	3	1	1	2	—	1	—	—	8	11	—
同好会	—	1	—	2	1	5	—	1	—	1	3	—	—	14	10	—

得点は、決勝進出得点1名1点。入賞得点は1位から6位まで順に6,5,4,3,2,1で与えられる

〝ソレーッ、ダルマの片方に目を入れろ!!〟チャピィのシンボル・いちごまで登場は、関西中国ブロック。

いつもはお客さまをリードする店主のみなさんも、ミニで楽しくエキジビションレース。

手に手にクラブ旗をもってやってきた中部ブロック代表選手。向うのお城は名古屋城〝尾張名古屋は城でもつ〟でブロック2位。

YGSF杯争奪 モトクロス選手権 レース結果

◆ノービス50ccクラス

1	天内保幸	北海道
2	桑名芳寿	関東C
3	百海賢次	中部
4	原子三雄	北海道
5	大塚保	関東A
6	中間美晶	九州

◆市販車100cc以下クラス

1	平田俊也	中部
2	小野寺健一	東北
3	真藤秀生	関東A
4	菅原雅之	関東A
5	熊谷君男	東北
6	志々田烈	関東A

◆ミニトレール50ccクラス

1	大越光男	関東C
2	岡田陽一	関東A
3	中村和夫	九州
4	松浦祥二	中部
5	佐々木金次	九州
6	福田則夫	東北

◆ノービス90ccクラス

1	真辺昭幸	中部
2	岩岡忠夫	関東C
3	光安鉄美	九州
4	山下正明	—
5	新井茂	関東A
6	早乙女護	関東A

◆市販車101ccクラス

1	原田正則	関東A
2	小林三功	中国
3	金沢光章	関東B
4	長谷川仁	関東B
5	高田寛	関東A
6	鈴木陸夫	中部

◆ミニトレール60～80ccクラス

1	小園功	北海道
2	小室幸夫	関東C
3	山本勝美	関西
4	羽山浩平	中部
5	田代秀樹	中部
6	荒谷好信	中国

こりゃまた大胆不敵な応援を!!

ヤマハ
グランドスポーツフェスティバル

モトクロス会場

ゴール地点で太鼓をドン、ドン鳴らし、ラブラブハットで派手に応援するのは関東ブロック

九州男児は太い「ボクも太〜いヨ」と九州ではおなじみモトクロス坊やの浜順一クン。父さん(後)と一緒にやってきたが、若すぎてエントリーできず。

◆エキスパートジュニア250ccクラス

1	熊谷義貞	関東B
2	吉原明正	中部
3	若林孝明	中部
4	渡辺政由	関東B
5	花城清友	関西
6	桶田進	北海道

◆ジュニア250ccクラス

1	東福寺保雄	関東A
2	木原泰久	関東A
3	北林武志	東北
4	西村重幸	関東B
5	原田正則	中部
6	平野文夫	—

◆ジュニア90ccクラス

1	東福寺保男	関東A
2	岩崎正男	関東A
3	斉藤克己	関東C
4	平山仁文	関東A
5	青山清	中国
6	長谷部勇	関東C

◆ノービス125ccクラス

1	村上光則	関東A
2	米田真一郎	中部
3	小川正	関東A
4	光安鉄美	九州
5	児島賢一	関東B
6	小川浩一	関東C

◆グランプリモトクロスレース

1	鈴木都良夫	遠州ライダース
2	瀬尾勝彦	エキスプレス
3	杉尾良文	神戸木の実
4	岩尾一敏	エキスプレス
5	P・カールスマーカー	米国
6	小林光広	スポーツライダース

◆エキスパートジュニア120ccクラス

1	吉原朋正	中部
2	熊谷義貞	関東B
3	桶田進	北海道
4	日下哲也	北海道
5	花城清友	関西
6	若林孝明	中部

◆ジュニア125ccクラス

1	原田正則	中部
2	東福寺保雄	関東A
3	斎藤克己	関東C
4	五十嵐聖治	北海道
5	平山仁文	関東A
6	岩崎正男	関東A

◆ノービス250ccクラス

1	伊藤一衛	中部
2	村上光則	関東A
3	神戸厚夫	中部
4	中野真人	関東A
5	有田尚明	関東A
6	綿引康展	関東C

ジムカーナ

観るＹＧＳＦから参加するＹＧＳＦへ…。だれでも気軽に出場できるジムカーナも、二日間にわたって、たいへんなにぎわいを見せた。

★プジョーサイクルによる遅乗り競走

ロードレース会場やモトクロス会場から、高速回転のエンジン音が聞こえてくるのと対象的に、ここでは、いちばん最後にゴールインしたものが勝ち。バランスのとりやすいプジョーサイクルの長所が発揮されていた。

★ジッピィ、チャピィの服装競走

「ヨーイ・ドン」の合図で長靴をはき、ヘルメットをかぶり、待機している車に突進。アゴヒモがゆるんでいたら一着でも失格。笑い声の絶えないジムカーナ会場だった。

★カートのスラローム競走

パイロンの間をぬって全力疾走。高性能のヤマハカートも、ここでは一定以上のスピードが出ない仕組み。ヤングはもちろん、年配の人も女性も、コーナーワークのスリルを満喫していた。

オートバイともレーシングカーとも違ったカート独特の魅力を楽しむヤングたち

老いも若きも トライ&チャレンジ

▼気はあせるけど、ヘルメットが、ブーツが……。
応援団も腹をかかえるジムカーナ

▼「ここを手前に回すとスピードが出る」
オートバイに馴れない人も気軽に参加

▲「モトクロスで入賞できなかったから、ここで雪辱だ。おっとっと、やっぱりむりかな」

▲「早く走るのなら自信があるけど…」
こんどブジョーでサイクリングするか」

SF大会

コーナーワークのテクニックを競うスラローム走行

●トリオで競うセーフライディング

二輪車安全運転YG

全国から選抜された二輪車のベテランによる安全運転コンテスト。男性二人、女性一人がチームを組んで、正しい走行テクニックを競い合った。

出場者は、地区単位、事業所単位で選ばれた四十四チーム。テクニカルセンター磐田のメンバーで構成された審査員のきびしい視線を浴びながら、交差点の右折、制動、スラローム、連続屈折コース走行、悪路でのバランス維持、一本橋渡りなど、変化に富んだ課題にいどんだ。

二日間にわたる競技の結果、静岡県選抜の原崎康夫、広岡和代、日達和伯チームが総合優勝。個人では鈴木良彦選手と渥美秀子選手がそれぞれ優勝杯を手にした。

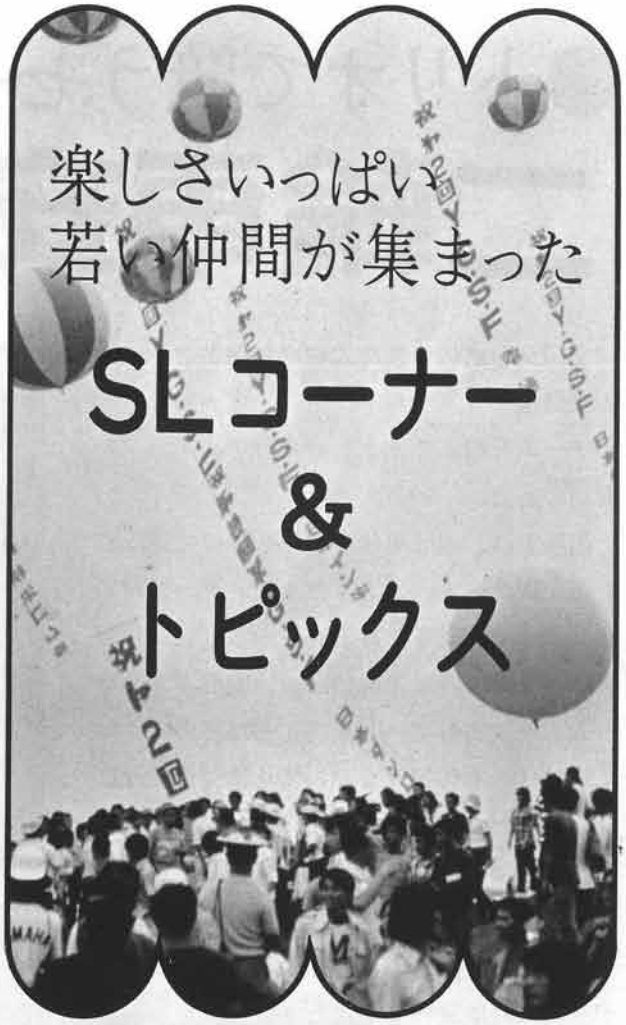
頑張った女性群。しかし成績は男性群におよばなかった

それぞれのセクションでの得点が、パッと明示され、観客にもわかりやすい

カマボコ形の鉄板の上をスラローム。いちばんむずかしいセクションだ

ＹＧＳＦ川上杯を手にしたチーム優勝のトリオは第11班でした

車齢16年のＹＡ１で駆けつけた東京・立川の横山日吉（63）さん。「４日はキャンプをはって……と思いましたが、こんなにすばらしいフェスティバルを一人で見るのは惜しい。きょうは帰って明日は仲間と共に出かけてこよう」と元気いっぱいでした



楽しさいっぱい 若い仲間が集まった SLコーナー & トピックス

フェスティバルならでは……、そしてジッピィならでは……のスナップです

フジへ、フィスコへ、ＹＧＳＦへ。オートバイ、四輪車をつらねてのＳＬファンがどっとおしかけ、一時はメインゲート前は人とクルマのすごいラッシュとなった

富士スピードウェイの周辺には、キャンプを張ってオープンを待つＳＬ仲間も少なくなかったのです

メインスタンドを埋めつくしたいっぱいの人、人、人
あなたは、そしてあなたのお店のお客さまは……

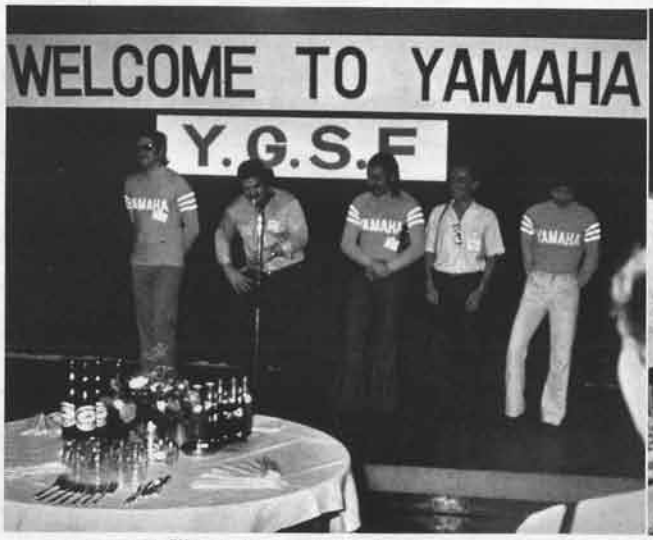
ネ、サインしてェ……。東北のお姐さまにつかまって花笠にサインするキャラザース選手

内外の記者が入り乱れて、こちらは取材合戦

ズラリならんだＹＧＳＦ川上杯トロフィ。さて誰れの手に……

YGSFを取材に 海外からも多数の記者が来日

Yamaha Grand Sports Festivalの名は、第2回にして海外にも大きな反響を呼び、アメリカ、ヨーロッパ、中南米各国からおよそ20名におよぶ記者団が来日、4日午後4時30分からホテルマウント富士において国内記者団および内外のスター・ライダーと交歓会をもった。



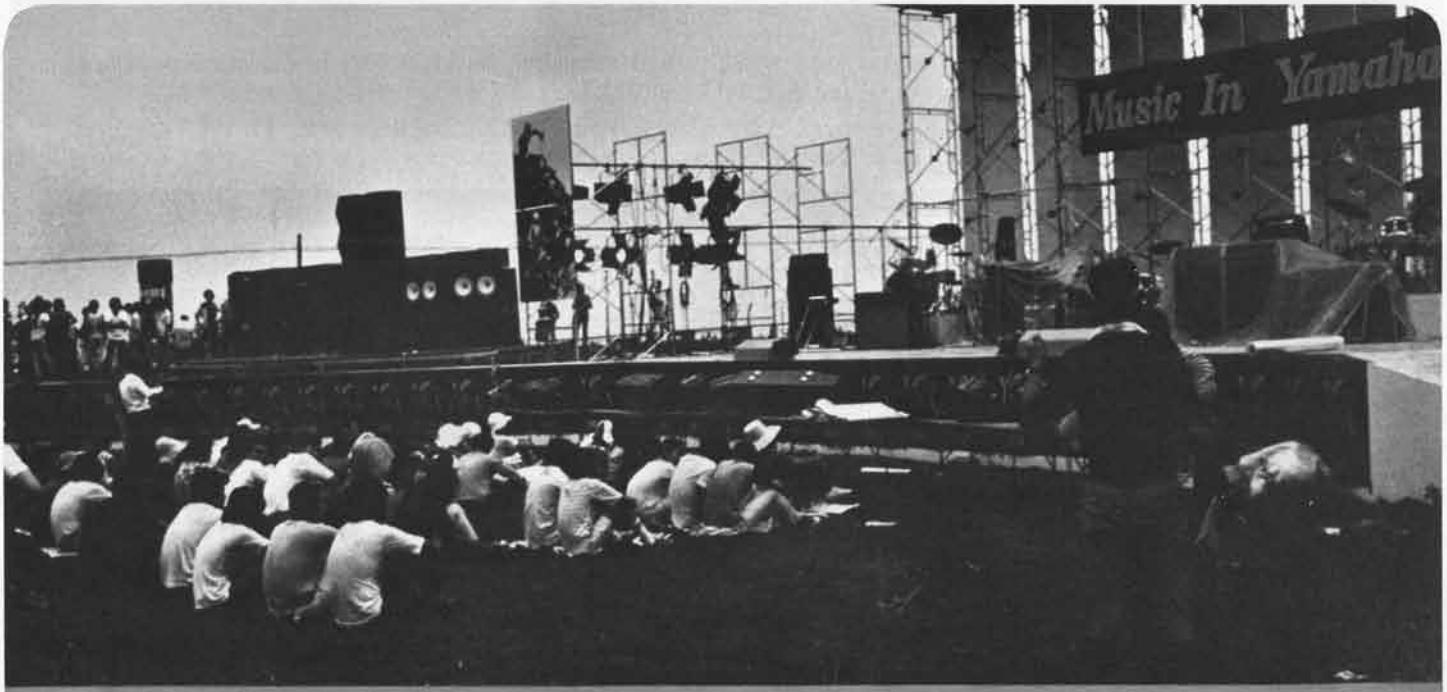
ヤマハから贈られたユニフォームを着用してあいさつする南米の記者団

ヤァ、ヤァ。なごやかなパーティ。ロードとトライアル、レパートリーこそちがえ同じＳＬ仲間。身ぶりも入って話がはずむ

内外の一流スター・ライダーを集めてのサイン会。色紙に、シャツに、せっせとペンを走らすロードの金谷秀夫、河崎裕之選手。

ＹＧＳＦを記念してフォトコンテストの撮影会もひらかれた。美女とヤマハを組合わせて自称名カメラマンがパチリ、パチリ

ちょっとした市場なみの混雑をみせたヤマハ純正部品展示促売コーナー



星空のもと、ビートのきいたサウンズが若い心をゆさぶるはずであったミュージック・イン・ヤマハの特設会場。ご覧のように開演前からお客さまがつめかけていたが、突然の激しい雷雨に見舞われ、中止の止むなきにいたったのはかえすがえすも残念なことであった

出足快調!! あつまったSL仲間の車。
くるま、クルマ。四輪車4,600台、バス450台、
二輪車33,500台が広大な駐車場を埋めた。

SLセクション

ョン。ここにはヤマハ製品展示コーナ
センター磐田コーナー、免許相談コー
り沢山のコーナーで人気を呼んだ。

人気を呼んだ

メインスタンドうらの一大ＳＬセクシー、ＳＬクラブコーナー、テクニカルナー、ショッピングコーナーなど、も

ヤマハ
グランド
フェスティ

ヤマハ 製
展

営業種目・自

ヤマハニュース号外・昭和48年9月1日発行・発行所：ヤマハ発動機株式会社＝静岡県磐田市新貝2500・発行人：小池久雄

また来年、YGSFの旗の下で！

健全なスポーツレジャーの振興を目指す

ヤマハ　グランド　スポーツ　フェスティバル

関東Aブロック2年連続優勝！

YGSF杯争奪モトクロス選手権大会

地区対抗では、昨年に引きつづき関東Aブロックが最高得点を挙げた。優勝旗を再び手にした伴野喜代三郎 関東A代表。